

海外で学んだことを今

新潟県新発田市立猿橋中学校

三年 内田大和

「エジプトに行くぞ。」

父が突然告げた。小学校の二年生の時だった。教師をしている父がエジプトの日本人学校で働くことになったのだ。テレビでしか見たことのない場所とちゃんと生活できるのかという不安と、友達と会えなくなるさみしさで涙が止まらなかったことを覚えている。

飛行機で十四時間、エジプトに到着した。空港のロビーを出ると、四月なのに肌が焼けるような暑さだった。砂ぼこりの舞うかすんだ空気、茶色っぽい建物、肌の色や服装が違う人たちがたくさんいた。聞き慣れないアラビア語がとびかっていた。本当に何年も暮らせるのかとますます不安な気持ちでいっぱいになった。

しかし、慣れない環境で生活する不安が徐々に消えていった。なぜなら、エジプト人は、陽気で、気軽に「ハビーハビー」と満面の笑顔で頭をなでてくれたからだ。ハビーハビーとは、アラビア語でかわいという意味だ。エジプト人は子どもにとっても優しい。何を言ってるのかは分からなかったが、誰彼となく笑顔で話しかけてくれた。たとえ国や言葉が違って、彼らの笑顔によって不安が安心に変わりエジプ

ト人が好きになってきた。

近くにあったパン屋さんは、私を見つめるたびに「ヘイ、Yamatoハビーハビー」と笑顔で声をかけてくれた。買うときは大人より子どもを優先し、何度もサービスしてくれた。その屈託のない笑顔、優しさはどこからくるのだろうか。砂漠に代表される厳しい自然環境が、助けあう風土を作り出し、情に熱く優しい人を作っているのではないかと思った。私は、そんなエジプトが大好きになった。

エジプトに来てから二年が過ぎようとしていた一月、事件が起きた。学校の登下校のとき、スクールバスの窓から小さなデモ隊を見た。いつも私に接してくれるような笑顔とは正反対に怒り、強く何かを訴えていた。それから数日後の一月二十五日、大規模なデモがタハリール広場で起きた。これが、アラブの春エジプト革命である。学校が急に休みになり、外出禁止になった。私の家の近くで国民と機動隊が衝突した。デモを止めようとした機動隊に対し、国民が投石や火炎瓶で抵抗していた。頭から血を流し、戦っている人がたくさんいた。遠くで戦車や建物が燃え上り、黒い煙が立ち込める中で人々が大声で叫んでいた。今にもこちらに来るのではないかと恐怖におびえた。

日本語の衛星放送で「こんなに貧しかったのは政治のせいだ。このままでは国が終わってしまう。」と国民が訴えていることを知った。デモ隊は、普通の生活を送りたい、未来のあるかわいい子どもたちを守りたい、助けたいという気持ちからだということが分かった。また、世界が取り上げるほどの出来事が起きていることを知った。

国民と機動隊の衝突はもはや戦争といってもいいほどの出来事だった。この事件により死者や重傷者が大勢出た。すぐそばで、あの優しい人たちがと思

うと、とても悲しかった。残酷なことだと思った。このデモで亡くなった人たちの家族はどんなに悲しんでいるだろう。もし、子どもがいたら、その子どもの将来は、どうなるのだろうか。

感じることや考えることは一人一人違う。違うからと言って、暴力に訴えていいのか。私は今、生徒会の仕事をしている。意見をまとめることが一番難しい。しかし、まとまらないからと言って、自分の力づくでまとめることはしない。いや、やってはいけないことだとも思う。何度も話し合い、共通点や努力すべき方向を見つけていくことが大切だと思うからだ。

大好きなエジプトは、まだ油断できない状況だ。何とかよい方向にいくことを望んでいる。またいつかエジプトを訪れ、あの笑顔に会い、笑顔をさらに輝かせられるような大人になりたい。